

障害のある子どもが 安心して避難できる場を

東日本大震災は、障害のある子どもやその家族にどんな影響があったのか。宮城県立古川支援学校の教員、八反田(はつたんだ)史彦さんに聞きました。

(聞き手 岩井亜紀)

宮城県立古川支援学校教員

八反田史彦さんに聞く

震災当時、勤務していた釜、多賀城市と七ヶた利府支援学校の学区には、津波の被害が大きかった仙台市宮城野区、塩学部卒業式でした。そのため高等部は休みでした。

特別な困難抱え

幸い、生徒の中で死者・行方不明者はありませんでしたが、震災直後は、子どもたちの安否確認のため出勤できた同僚と車で走り回りました。たんの吸引や経管栄養など医



八反田史彦さん

実態に即した法整備必要

療的ケアの必要な子どもに、医療機器に必要な燃料や水を届けに行けた同僚もいます。

障害のある人(児童)は、避難所で特別な困難を抱えることになりました。

自閉症の子どもは、環境の変化に対応できず大声を出す、いきなり走り出すなどパニック症状を起こしてしまい、家族は周囲に気を使って避難所を出ざるを得ませんでした。医療的ケアの必要な子どもの家族は、医療機器の電源確保のため車の中で数日間過ごしたとい

います。一方、先生が自主的に避難所運営をした県内の支援学校へ避難した家族らは、いくらか安心して過ごせたようです。最後まで残っていたのは、生

徒の家族でした。しかし、避難所指定を受けていないため、当初は支援物資が届かなかったという問題もありました。気分転換が必要だろうと、子どもをショートステイに預けるようにアドバイスしても、それさえ断ってしまうほどでした。

支援学校は、普段そこへ通う子どもたちにとっては環境の変化が少ないという点から、またほかの障害のある人にとっては大規模な災害時に、障害のある人が安心して避難生活を送ることができるところを計画的に整備することが重要だと思えます。

震災後、精神障害のある生徒(17)は普段と比べ妙にハイなのです。その明るさがかえって心配になります。さらに、国政のあり方を抜本的に見直し、社会保障、福祉、教育を柱にした国づくりのシフトしていくことこそ、国民全体が安心して暮らせる社会にできるのだと思います。それが、「復興」につながるのだと思いま

す。

家族もダメージ

障害のある子どもだけでなく、家族も精神的に大きなダメージを受けました。ある生徒の母親は、無気力になってしまいました。